

送り仮名による書き分けについて

武 部 良 明

一 考察の観点

一般の動詞の連用形については、動詞としての使い方のほかに、名詞としての使い方がある。「動く」という動詞について見ると、「車が動き、……」というのは動詞としての使い方であるが、「車の動きが遅い」となれば、名詞としての使い方になる。問題は、この名詞の場合の送り仮名の付け方である。

この点について、現行の内閣告示「送り仮名の付け方」によれば、動詞のときに通則一の本則により「活用のある語は活用語尾を送る」から、「車が動く」「車が動き、……」のようになる。これに対して名詞のときは、通則四の本則により「活用のある語から転じた名詞は、もとの語の送り仮名の付け方によって送る」から、「車の動きが遅い」のように「動き」となる。これが一般の動詞の場合の送り仮名である。

ところが、通則四には例外があつて、活用のある語から転じた名詞のうち、「次の語は、送り仮名を付けない」となっている。

例えば、「組む」という動詞について見ると、前記の本則によって「組み」と送り仮名が付くにもかかわらず、例外の中に「組」という送り仮名を付けない形が掲げられている。ここで取り上げる「送り仮名による書き分け」というのは、例えば、こういう場合の「組み」と「組」のことである。そうして、このような送り仮名の有無がどのような意味の異同と対応する書き分けになるのか、ということである。

二 例示の検討

まず、動詞としての使い方「車が動く（車が動き、……）」の「動く（動き）」の意味と、名詞としての使い方「車の動きが遅い」の「動き」の意味は、どのように異なるかということである。これについて、名詞としての「動き」の意味は、動詞「動く」の意味がそのまま名詞化したものだとされている。そうだとすれば、「動く」と「動き」は、共に送り仮名を付けたほうが整うわけである。通則四の本則で、「活用のある語から転じた名詞」の場合

に、「もとの語の送り仮名の付け方によって送る」のは、このような事情に基づくのである。同じことが、「組む」と「組み」についても言えることになる。「組み」という名詞において「組む」という動詞の意味がそのまま名詞化したものだとなれば、送り仮名の付いた形の「組み」でよいことになる。それにもかかわらず、特に送り仮名を付けない「組」という形を例外とする理由は何かということである。

このことについて、通則四のうち、送り仮名を付けない「組」などを掲げた例外のあとに（注意）があり、そこに次のような解説が添えられている。

ここに掲げた「組」は、「花の組」「赤の組」などのように使った場合の「くみ」であり、例えば、「活字の組みがゆるむ」などとして使う場合の「くみ」を意味するものではない。

その趣旨は、「組む」という動詞の名詞形としての「くみ」には、相異なる二つの意味があり、それを送り仮名の有無によって書き分けるということである。

この場合に、動詞としての使い方「活字を組む（活字を組み、……）の「組み」の意味と、名詞としての使い方「活字の組みがゆるむ」の「組み」との関係であるが、これは、前記「車が動く（車が動き、……）」と「車の動きが遅い」の「動き」と同じ関係であって、動詞の意味がそのまま名詞化した「組み」とすることができる。他に同じような例を求めれば、「ナイフとフォークを組みにして売る」とか「男と女が組みになって踊る」などの「組み」がある。このような「組み」について、この（注意）の中では、

「動詞の意識が残っているような使い方」という解説をしている。この解説は、そのまま前記の「動き」にも当てはまるのであり、このほうがむしろ一般的な使い方なのである。

これに対して、「花の組」「赤の組」などのように使う場合の「組」は、「組む」という動詞の意識から離れて、「クラス・グループ」の意味になっている。語源的には「組む」意味からの派生であったとしても、「組む」という動詞の意識を全く失い、別の意味の名詞になっている。そうすると、一般の名詞である「月・鳥・花・山」などと同じように、送り仮名を付けない形のほうが整うわけである。その点で、通則三の本則「名詞は、送り仮名を付けない」を適用するのと同じ形にしたのが、「花の組」「赤の組」などの「組」という形なのである。そうして、そのような意味の異同を送り仮名の有無によって書き分けるのが、この「組み・組」の書き分けになるのである。

ところで、前記の（注意）であるが、そこには、「組」の他に、「光・折・係」などについても、「同様に動詞の意識が残っているような使い方の場合」に「本則を適用して送り仮名を付ける」旨が書かれている。この三語については用例が示されていないが、「組み・組」の場合に準じて考えれば、「折・係」については、一方に「とき」「担当者」の意味があるから、次のように書き分けることが容易である。

○折り・折……紙を二つに折る・紙の折りが正しくない・折に触れて思う

○係り・係……下の名詞に係る・係りの助詞・それぞれの係を

決める

これらは、「組み・組」と同じような関係であり、その異同も分かりやすいわけである。

つまり、「折り」が「折る」という動詞の意識を残しているのに対して、「折」はそのような意識のない「とき」の意味であって、全く異なることになる。また、「係り」のほうが「係る」意識を残しているのに対して、「受付係・進行係」などの持ち場を決める場合の「係」は、「担当者」の意味であって、これも全く異なっている。その点で、この二つの書き分けは、分かりやすいのである。これに対して、「光り・光」の場合は、どのようになるかということである。

しかし、「光り・光」について、「光る」という動詞の意識を残している「光り」と、そのような意識のない「光」そのものを分けて考えることができないかといえば、不可能ではない。その場合には、次のような書き分けになるはずである。

○光り・光……宝石が光る・才能が光る・宝石の光りが鈍い・才能の光りを感じる・青い光を放つ・前途に光を見いだす

このように考えれば、紛らわしい「光り・光」の間にも、送り仮名の有無による意味の異同を読み取ることが可能である。したがって、同じ「弱い」が続いても、「光り」と「光」の間に、次のような意味の異同を見逃してはならないのである。

○光りが弱い……動詞の意識を残した光ること自体が弱い
○光が弱い……本来の名詞としての光そのものの実体が弱い

こうして、動詞の「光る（光線を発する）」という意識を残した名詞と、本来の名詞としての「光そのもの（光線そのもの）」との間に別の意味を認めることができれば、そのような「光り・光」については、「組み・組」「折り・折」「係り・係」と同じ関係を考えることができるわけである。

三 該当する範囲

送り仮名の有無によって意味の異なる語という点で、前記の（注意）の中に引かれたのは、前節で取り上げた「組・折・係・光」の四語だけである。しかし、「組み・組」について例示したあと、「光・折・係」について「なども」と書かれているから、他にも該当する例のあることが明らかである。この場合に、通則四で送り仮名を付けないとした例外が、「次の語は、送り仮名を付けない」というように、「次の語」と書かれていて、それに添えたのが前記の（注意）である。そのことから考えると、そこに掲げられた例外の語が該当すると考えてよいのである。

そこに例外として掲げられたのは合計で二十七語になるが、見やすいように五十音順に並べ直すことにする。それらは、次の二十七語である。

頂 謠 虞 帶 趣 折 卸 係 掛 組 煙 恋 肥 水
志 印 疊 次 隣 富 並 恥 話 光 舞 卷 割

ただし、これら二十七語のすべてが送り仮名の有無によって書き分けられるかといえば、そういうことはない。これを取り上げる、次のようになる。

まず、この中には、「常用漢字表」の音訓欄に名詞訓だけが掲げられていて、動詞訓の掲げられていないものがある。この場合の字訓の掲げ方は、「表の見方及び使い方」によれば、動詞訓は名詞にも使つてよいが、名詞訓は「名詞としてだけ用いる」ものである。その点で「虞（おそれ）・趣（おもむき・氷（こおり）・印（しるし）・並（なみ）」の五語については、名詞訓だけであるという理由で、送り仮名の付いた形が成り立たないことになる。すなわち、「虞・趣・氷・印・並」の五語は、ここでの考察の対象にはならないのである。次に、「恋（こゝ・こい）・隣（となり）」の二語であるが、動詞訓の例欄の語例が「恋い慕う・恋い焦がれる」「隣り合う」となっている。考えてみると、口語としてはこのような複合動詞だけであつて、単独の「恋う・隣る」の形は用いない。すなわち、「恋い・恋」「隣り・隣」の対応も成り立たないのであつて、やはりここでの考察の対象にはならないのである。

このように考えを進めると、これら計七語を除いた残りの二十四語が、該当例となる候補である。このうち「折・係・組・光」の四語については前節で取り上げたので、以下、それ以外の十六語について検討を進めることにする。

まず、前記「組み・組」の「組（クラス・グループ）」のように、名詞として明らかに異なる意味を持つものを取り出すと、次の六語がこれに該当する。

頂（頂上）・掛（担当者）・肥（肥料）・畳（和室用の敷物）・

巻（書物の区分単位）・割（割合の単位）

これらについて、前記「組・折・係」と同じように取り上げると、

次のようになる。

○頂き・頂……お金を頂く・頂きが少ない・山の頂が見える

○掛かり・掛……費用が掛かる・わなに掛かる・エンジンが掛かる・掛かりがかさむ・わなの掛かりが悪い・エンジン
の掛かりがよくない・仕事にはそれぞれ掛
が決まつている

○肥え・肥……土地が肥える・肥えがよくない・畑に肥をまく

○畳み・畳……傘を畳む・畳みがよくない・部屋の畳を替える

○巻き・巻……ねじを巻く・包帯を巻く・巻きが足りない・巻
きがよくない・巻の一から始める・須磨の巻まで

読んだ

○割り・割……三人で割る・割りが悪い・割の単位で比べる

これらは、いずれも「組み・組」のように、明らかに意味の異なる見られる該当例となるのである。

これに対して、「謡・卸・煙・恥・話・舞」の六語については、事情が異なっている。このほうは、前節の「光り・光」と同じような考え方を要するからである。すなわち、「光る」という動詞の意識を残している「光り」と、そのような意識のない「光」そのものを、分けるという考え方である。その場合には、次のような書き分けになるはずである。

○謡い・謡……地を謡う・地の謡いがよくない・謡の師匠に就いて習う

○卸し・卸……小売りに卸す・小売りへの卸しだけを扱う・卸で売る

○煙り・煙……薪が煙る・かすみに煙る・薪の煙りがひどくなる・かすみの煙りが始まる・黒い煙が立つ・野辺の煙と消える

○恥じ・恥……人前で恥じる・人前に恥じに出たようなものだ・恥を知れ

○話し・話……何でもよく話す・話しが好きな人だ・話を聞きに行く

○舞い・舞……剣を持って舞う・剣の舞いが面白い・神楽の舞を見る

こうして、動詞の意識を残した名詞と、本来の名詞との間に別の意味を認めることによって、「光り・光」と同じような書き分けを考慮することができるのである。

問題は残る四語「帯・志・次・富」であるが、これらについては、前記のような用例が、一般には見られないのである。例えば「帯」であるが、動詞として次のように用いる語である。

○帯びる……刀を帯びる・赤みを帯びる・任務を帯びる・（帯を締める）

しかし、「活字を組む」に対する「活字の組み」のような「動詞の意識が残っているような使い方」が見られない。例えば、次のような使い方は、一般には用いられない。

○帯び……×刀を帯びに行く・×赤みの帯びが弱い・×任務の帯びを忘れる

同じことが「志し・次ぎ・富み」についても言えることは、次のとおりである。

○志し……学問に志す・×学問に志しに行く・（志が堅い）

○次ぎ……大阪は東京に次ぐ・地震に次ぐ津波・×大阪の次ぎが変わる・×津波の次ぎがない・（社長の次に偉い）

○富み……家が富む・経験に富む・×家の富みが遅い・×経験の富みが著しい・（巨万の富を蓄える）

このように見てくると、「組み・組」「光り・光」のような書き分けが、「帯び・帯」「志し・志」「次ぎ・次」「富み・富」の間では成り立たないのである。³⁾

したがって、送り仮名の有無による書き分けが成り立つのは、前記二十七語のうち、次の十六語である。

頂 語 折 卸 係 掛 組 煙 肥 疊 恥 話 光 舞
卷 割

これが、現行の「送り仮名の付け方」によって考えた場合の、一応の目安である。

四 複合の語の場合

以上、ここでは、漢字一字を用いて書き表す単独の語について見てきたが、同じような書き分けは、漢字二字以上を用いて書き表す複合の語についても見られるわけである。この場合、複合の語については、内閣告示「送り仮名の付け方」において通則六と通則七に分かれているので、ここでも、この二つの場合を分けて取り上げることにする。

まず、通則六を適用するほうであるが、その本則には、次のように書かれている。

複合の語の送り仮名は、その複合の語を書き表す漢字のそれぞれの音訓を用いた単独の語の送り仮名の付け方による。

したがって、単独の語に見られた送り仮名の有無による書き分けが、そのまま複合の語にも持ち込まれるのは当然である。これを、前記の「組み・組」に当てはめて考えると、次のような書き分けがこれである。

まず、「組み」のほうであるが、「腕を組む」意味の名詞形は、「組む」意識が残っているから、「腕組み」になる。その点では、次のような語の場合も同じである。

石組み 縁組み 木組み 心組み 縦組み 骨組み 棒組み
三つ組み 横組み 枠組み 意気組み 小屋組み 三人組み
また、「組んだ糸」の名詞形も、「組む」意識が残っているから、「組み糸」になる。こうして、次のような形が成り立つ。

組み垣 組み木 組み曲 組み杯 組み重 組み版 組み物
組み格子 組み写真 組み天井 組み見本

これらに対して、「クラス・グループ」の意味では「組」になるから、「花の組」「赤の組」は「花組」「赤組」である。こうして、このほうの形では、次のようになる。

白組 月組 隣組 星組 雪組 女子組 男子組 男女組

年長組 落第組

また、そのような「組」の長は「組長」になるから、次のような形も成り立つことになる。

組員 組頭 組子 組衆 組替え 組違い 組外れ 組番号
組部屋 組屋敷

このようにして、「く組み・く組」「組みく・組く」という送り仮名の有無が、意味の違いによる書き分けとなるのである。

したがって、単独の語として「組み・組」と同じような書き分けが見られた他の語の場合も、複合の語として、次のような書き分けになるのは当然である。

○頂き・頂……菊頂き 頂き物 山頂 頂道
○折り・折……指折り 折り紙 時折 折節
○係り・係……下係り 係り結び 進行係 係長
○掛かり・掛……大掛かり 掛かり湯 浄書掛 掛員
○肥え・肥……腹肥え 肥え土 元肥 肥車
○畳み・畳……八重畳み 畳み板 青畳 畳表
○巻き・巻……遠巻き 巻き毛 下巻 巻一
○割り・割……頭割り 割り石 五割 割高

これらの場合は、単独の語として明らかに異なる意味を持つのであり、他と複合してもその書き分けが残るのである。

次に、「光り・光」のほうであるが、これも、単独の語の書き分けと同じように考えることができる。まず、「黒く光る」意味の名詞形であるが、「光る」意識が残っているから、「黒光り」になる。その点では、次のような語の場合も同じである。

青光り 片光り 底光り 中光り 七光り 両光り

また、「光る物」の名詞形も「光る」意識が残っているから、「光り物」になる。こうして、次のような形が成り立つことになる。

光り合い 光り木 光り草 光の玉 光り虫 光り藻
これらに対して、本来の名詞そのものは「光」になるから、「稲

を「実らす光」の意味では、「稲光」である。このほうは、次のようになる。

飾り光 包み光 残り光 合成光

また、そのような「光」というものを取り入れるのが「光窓」であるから、次のような形も成り立つことになる。

光神 光滅 光増 光室 光取り 光因子 光合成 光通信
このようにして、「光り・光」「光り・光」という送り仮名の有無が意味の違いを表すことは、前記「組・組」「組・組」の場合と同じである。

したがって、同じようにして、次のような書き分けも成り立つわけである。

○謡い・謡……独り謡い 謡い物 素謡 謡本

○卸し・卸……棚卸し 卸し荷 元卸 卸商

○煙り・煙……薄煙り 煙り草 夕煙 煙窓

○恥じ・恥……隠れ恥じ 恥じ入り 赤恥 恥隠し

○話し・話……高話し 話し声 昔話 話本

○舞い・舞……小舞い 舞い納め 京舞 舞扇

このように見てくると、同じ「好き」が続いた「話し」と「話」の間に、次のような意味の違いがあることも分かるようになる。

○話し好き……動詞としての「話す」意識を残しているから、

「話すことが好き」という意味になる

○話好き……本来の名詞としての「話」そのものだから、「話（を聞くこと）が好き」という意味になる

このような書き分けが、「組み分け・組分け」などの間にも見ら

れるのは、言うまでもないことである。

ところで、単独の語としては用いない動詞「恋う・隣る」の場合であるが、複合の語として「恋い慕う」「隣り合う」と用いることは、すでに触れたとおりである。そのために、複合の語としては、次のような書き分けが成り立つことになる。

○恋い・恋……恋い慕い 色恋 恋心

○隣り・隣……隣り合わせ 両隣 隣町

また、複合の語の場合は、方法を表す「方」などを添えることにより、「帯・志・富」の場合にも、次のような書き分けが成り立つことになる。

○帯び・帯……帯び方 袋帯 帯留め

○志し・志……志し方 初志 志立て

○富み・富……富み方 国富 富札

ただし、「次」については、「次ぎ方」などの形も成り立たないから、このような書き分けも見られないわけである。

なお、単独の語としては「常用漢字表」で名詞訓にだけ用いる「虞・趣・氷・印・並」であるが、この中では、「並」だけが該当する。その理由は、「常用漢字表」の例欄が次のようになっているからである。

並の品 並木 足並み

これに従えば、次のような書き分けが成り立つことになる。

○並み・並……足並み 並物

この場合は、「並んでいること」が「く並み」であるとともに、中位のもの「並」だからである。

五 慣用の語の場合

次に、通則七を適用するほうであるが、そこには、次のように書かれている。

複合の語のうち、次のような名詞は、慣用に従って、送り仮名を付けない。

そこに掲げられたのが「頭取・鎌倉彫・切手・合図」などであり、これらは慣用として送り仮名を付けないから、それに従うわけである。ただし、前書きのあとにある「本文の見方及び使い方」には、次のように書かれている。

通則七は、通則六の例外に当たるものであるが、該当する語が多数に上るので、別の通則として立てたものである。

したがって、通則六で「単独の語の送り仮名の付け方による」ほうが本則なのである。そのように考えると、通則七に例示された中でも、例えば「組合」について言えば、次のような書き分けが見られてもよいのである。

○組み合い……動詞としての「組み合う」意識を残した形であるから、「組みついた争い」の意味になる

○組合……慣用として送り仮名を付けない名詞としての「組合」だから、「特定の目的を持った組織体」の意味になる

このような場合には、単独の「組み・組」と同じように、送り仮名の有無による書き分けが見られるわけである。

それでは、この「組み合い・組合」のような書き分けが成り立つものには、どのような例があるかということである。これを、

通則七に掲げられた範囲から拾うと、次のようになる。

○請け負い・請負……仕事を請け負う・仕事の請け負い・請負の親方

○受け付け・受付……願書を受け付ける・願書の受け付け・正門の受付

○受け取り・受取……手紙を受け取る・手紙の受け取り・受取をもらう

○書き留め・書留……手帳に書き留める・手帳の書き留め・書留で送る

○羽織り・羽織……上着を羽織る・上着の羽織り・羽織を着る

○踏み切り・踏切……実施に踏み切る 踏み切りが遅い・鉄道の踏切を渡る

○振り替え・振替……休日を翌日に振り替える・振り替えの休日・振替で送る

○物語り・物語……親しく物語る・親しい物語り・物語の作者

○割り引き・割引……割り引いて考える・割り引きで考える・割引で売る

これらは、一方に動詞としての用い方もあるため、それとの関連で、送り仮名の有無による書き分けが成り立つのである。

以上は、そのままの形が動詞ともなる場合であるが、動詞の意識を残しているだけでも、同じような書き分けが成り立つわけである。例えば、一般には「プログラム」の意味で用いる「番組」であるが、本来は「番を組む」ことであり、役割や順番を決めることである。その場合に「番組が難しい」といえば、「番を組

む」意識を残した用い方になるから、「テレビの番組」とは異なることになる。以下、このような「名詞＋動詞」の複合を通則七に掲げられた範囲から拾うと、次のような書き分けも成り立つことになる。

- 氣付け・氣付……氣が付く・氣付けの葉・立寄先氣付で届く
 - 小包み・小包……小さく包む・小包みの荷物・小包で送る
 - 手当て・手当……手を当てる・傷の手当て・期末の手当
 - 葉巻き・葉巻……木の葉で巻く・葉巻きにする・葉巻を吸う
 - 番付け・番付……順番を付ける・番付けをする・相撲の番付
 - 水引き・水引……水を引く・水引きの工事・水引を掛ける
 - 物置き・物置……物を置く・物置きに載せる・物置に入れる
 - 役割り・役割……役を割る・役割りが難しい・各自の役割
 - 夕立ち・夕立……夕方に旅立つ・夕立ちにする・夕立が降る
 - 両替え・両替……両方替える・両替えにする・小銭の両替
- これらもまた、送り仮名の有無による書き分けとなるのである。
- 以上の例は「名詞＋動詞」の複合であるが、「動詞＋名詞」の複合にも、同じような書き分けが成り立つわけである。
- 植え木・植木……木を植える・植え木に追われる・植木に水をやる
 - 置き物・置物……上に物を置く・置き物にする・出窓の置物
 - 消し印・消印……印で消す・消し印で訂正する・郵便の消印
 - 敷き石・敷石……石を敷く・敷き石に汗を流す・庭園の敷石
 - 敷き物・敷物……物を敷く・敷き物に使う・応接間の敷物
 - 立ち場・立場……その場に立つ・立ち場がない・相手の立場

○ 建て物・建物……物を建てる・建て物で飾る・学校の建物

○ 巻き紙・巻紙……紙で巻く・巻き紙の土産物・巻紙に書く

これらもまた、送り仮名の有無による書き分けとなるのである。

六 結 語

一般に、送り仮名の付け方には、ゆれている部分のあることが問題である。そのために、内閣告示「送り仮名の付け方」においても本則のほかに許容を設け、両様の書き方が整えられている。しかし、この場合は、送り仮名の有無が意味の違いの書き分けにはならないのである。

これに対して、ここで取り上げた「組み・組」「組み合い・組合」などは、送り仮名の有無がそのまま意味の違いを書き分けるところが異なっている。したがって、これを誤れば、表現と理解の両面において支障を来すのであり、事は極めて重大である。

この点で思い合われるものとしては、異字同訓漢字の書き分けや、漢字と仮名の書き分けがあり、表記の立場で特に重視されている。しかし、送り仮名の有無による書き分けも、それらに劣らず重要なことを、見逃してはならないわけである。

注(1) 改定前の内閣告示「送りがなのつけ方」では、通則十七のただし書き(2)がこれに該当する。そこでは、「慣用が固定していると認められる次の語は、送りがないをつけなくてもよい」という文言になっている。この「つけなくてもよい」が「組み・組」などの書き分けに当たるとされてきたが、明確ではなかった。その点を明らかにしたのがこの(注意)である。

(2) これらのうち、「眞・趣・氷・印」については、一方に「恐れる・赴く・凍る・記す」があるから、「湖の凍りが早い・湖の水が厚い」のような形では、送り仮名の有無による書き分けが成り立つことになる。

(3) 動詞に「お」を添える敬語表現を取り上げれば、「お志しの点は、お志によつて」などの書き分けが見られることになる。しかし、この形でも、「次ぎ・次」は成り立たないのである。

(4) 漢字との組み合わせではないが、「ひそひそ話し・きりきり舞い」などで送り仮名を付けるのも、同じ趣旨である。

(5) 例欄の「並木」のほうは通則七に例示されているから、この例

には該当しない。

(6) 通則七の(注意)には、「類推して同類の語にも及ぼす」旨が書かれている。したがって、実際の該当例は、これ以外にもいろいろ成り立つことになる。

(7) 前記の注(2)で示したのは、異字同訓のほうになる。広くこの点で取り上げれば、「編みの目・網の目」「借りの品・仮の品」「汗の固まり・土の塊」「似せの品・偽の品」「掘りが深い・掘が深い」なども、送り仮名の有無による書き分けになる。複合の語で言いは、「編み戸・網戸」「借り家・仮家」「言い分け・言い訳」なども、同じ種類の書き分けである。

新刊紹介

山下一海著

『昭和歳時記』

本書は、「流水」「卒業」「メーデー」「ビール」「終戦記念日」「ラグビー」など、明治・大正・昭和の時代に誕生した七十一年の季語について、例句を挙げつつ、そ

の性格や形成過程等を論じたもの。とはいえ、本書は単なる解説に終始するものではなく、読者は、著者の味わい深い筆致を染しみながら、季語生成の機微や俳句のおもしろさを知らず知らず感得することになる。それは、本書の根底に「魅力的な季語が生まみだされなくなることは、この国の大切なにかが衰弱していくこと」との認識があ

り、俳諧全般にわたる深い造詣と「さらに魅力的な季語の誕生を期待する」心が本書を裏打ちしているからである。花実兼備の好著たるべきこと、疑いえない一書である。
(平2・5 角川書店 四六判 二四一頁 一〇〇円)

〔佐藤勝明〕